

マーラー：リュッケルトの詩による 5 つの歌曲

グスタフ・マーラー（1860-1911）の創作のなかで、交響曲と並ぶもう一つの柱は歌曲であった。しかも「歌」はつねにマーラーの創作とともにあり、「交響曲第 1 番」が歌曲集「さすらう若者の歌」と、交響曲第 2 ～ 4 番が歌曲集「子供の不思議な角笛」と深く結びついていることはよく知られている。

「さすらう若者の歌」はマーラー自身の詩、「角笛」はドイツ民謡の詩によるものだが、その後マーラーは、ドイツ・ロマン派の詩人、フリードリヒ・リュッケルト（1788-1866）の詩にたどり着く。リュッケルトの詩は、シューベルトの「きみはわが戀い」、シューマンの「献呈」をはじめとする数々のドイツ・リート（歌曲）の源泉となったが、マーラーも彼の詩から想を得て、管弦楽伴奏による「リュッケルトの詩による 5 つの歌曲」と「亡き子をしのぶ歌」を作曲した。

管弦楽伴奏付きの「リュッケルトの詩による 5 つの歌曲」は、もともと連作歌曲集として書かれたのではなく、1901 年から翌年にかけて 1 曲ずつ作曲された。一貫したテーマはないため、演奏順も様々である。

#### 1 美しさゆえに愛するなら

美しさや若さゆえに愛するならやめて欲しい、ただ愛ゆえに愛してくださいと願う。マーラーの妻、アルマに捧げられた。この曲のみ、オーケストレーションは M.ブットマンによる。

#### 2 私の歌を見ないで

詩（歌）を書いている途中にのぞき見しないでと歌う。巣作り中のミツバチに例えているため、音楽はせわしない。

#### 3 私は優しい香りを吸い込んだ

恋人から贈られた菩提樹の香りに愛を感じる歌。オーボエやホルン、フルートの旋律が優しく歌に寄り添う。

#### 4 私はこの世から姿を消した

穏やかな諦観に満ちた曲。失恋の痛みなのか、世捨て人のように一人静かに安らぐ心境が歌われる。イングリッシュ・ホルンなどの管楽器が歌にこだまする。

#### 5 真夜中に

真夜中に眠れず、星たちも過去の思い出も慰めにならないと嘆くが、結局すべてを神に委ねることで安らぎを得る。

楽器編成：フルート 2、オーボエ 2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット 2、ファゴット 2、コントラファゴット、ホルン 4、トランペット 2、トロンボーン 3、チューバ、ティンパニ、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部、独唱

※スコア上の表記

ハンス・ロット：交響曲第 1 番 木長調

ハンス・ロット（1858-1884）は、マーラーのウィーン音楽院時代の学友で、ブルックナーの弟子である。役者だった両親が早く亡くなったため、彼は音楽院に通いながら修道院の教会オルガニストとして生計を立てる苦勞人だった。彼の部屋にはマーラーやヴォルフなど親しい学友が集まった。1878 年の卒業コンクールでロットが提出したのが、本日演奏される「交響曲第 1 番」の第 1 楽章である。だが、作品はブルックナー以外の誰にも評価されず、

マーラーの作品が優勝した。

1880年、「交響曲第1番」の全楽章を書き終えたロットは、オーストリアの国家奨学金に申請するため、評議員をつとめるブラームスのもとを訪れた。スコアを見せるとブラームスは「美しい部分もあるが、残りは平凡で無意味」と厳しい評価を下した。ロットはウィーン・フィルの指揮者ハンス・リヒターにも曲をピアノで弾いてみせたが、彼もこの曲を取り上げようとしなかった。こうした挫折により彼は精神を病むようになり、合唱指揮者のポストを見つけたものの、そこへ向かう列車のなかでブラームスがダイナマイトを仕掛けたという妄想に取り憑かれ、乗客にピストルを突きつけるという事件を起こしてしまう。

精神科の病院に入院中、皮肉にも国家奨学金の支給が決まったが、すでに病状は悪化していた。発病から4年後の1884年、ロットは結核のため、25歳という若さでこの世を去った。マーラーは「彼を失ったことで音楽界が被った損失は計り知れない。」とその死を惜しんだ。また、「彼と僕の個性はとてもよく似ている。僕たちは同じ木に育ち、同じ土から生まれ、同じ大気に育てられた、2つの果実のようなものだ」とも述べている。

「交響曲第1番」には、ブラームス、ヴァーグナー、ブルックナーなどドイツ・ロマン派の響きが自然に流れ込む一方で、マーラーの交響曲を先取りするような新しい響きも随所に聴こえてくる。第1楽章の主題が作品全体をひとつにまとめる手法が取られているのは、ベルリオーズの固定楽想やリストの主題変容、フランクの循環主題などの手法につながるものといえる。伝統を受け継ぎつつ、未来を予感させる交響曲なのである。

希望にあふれた雄大な曲であり、この後の運命がにわかには信じがたいほどである。

第1楽章「アラ・ブレーヴェ（2分の2拍子）」ホ長調：トランペットで開始される牧歌的でのびやかな第1主題（偶然にも「エデンの東」のような開始！）が、全曲を統一する重要な役割を果たす。この主題が大きく高揚した後、木管から平坦で穏やかな第2主題が現れる。

第2楽章「（アダージョ）、とてもゆっくりと」イ長調：高揚感あふれる緩徐楽章。主要主題は第1楽章の主題に基づいている。中間部は陰りを帯びる。

第3楽章「速く、生き生きと」ハ長調：スケルツォ楽章。マーラーのスケルツォを彷彿とさせるが、マーラーの方が後である。

第4楽章「とてもゆっくりと～動きを持って」イ短調～ホ長調：全曲中、この終楽章が最も長い。スケルツォの主題などが回想される暗い色調を帯びた前半部分にのち、曲が長調に転じて弦が新しい主題を開始するやり方は、ブラームスの「交響曲第1番」の終楽章のようである。曲が終結かと思わせた後、フーガ風の音楽となり、最後に第1楽章の主題が回想されて曲は雄大に幕を閉じる。

遠山菜穂美

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、  
コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、  
ティンパニ、トライアングル、弦五部  
※スコア上の表記